

推薦図書（1）

○障害の当事者と言われる方々が書かれた本

書名	概要
『「脳コワさん」支援ガイド』 鈴木大介著 医学書院（シリーズ ケアを考える） 2020年	高次脳機能障害の当事者である鈴木大介さんが、自らの体験世界を脳内の情報処理を意識して書かれた本 「感情の脱抑制」「注意障害」「パニック」など自らの体験症状を、脳内の情報処理スピードの低下、ワーキングメモリの低下などの言葉を用いて説明している。 鈴木さんは発病以前に、『最貧困女子』等生活困窮者などを題材とした著作物があり、当時取材した相手の症状と発病後の自分の症状に共通点が多いとしており、ケアと情報処理とを結びつけて考える上で、貴重な文献である。
『誤作動する脳』 樋口直美著 医学書院（シリーズ ケアを考える） 2020年	レビー小体型認知症の当事者である樋口直美さんが、自らの体験ん世界を描き出している書籍。 樋口さんは文筆を生業としており、「記憶障害」、「幻覚」、「時間意識の低下」などと言われる事象について、自らが実際に体験した状況をととてもリアルに描き出している。
『自閉症の脳を読み解く』 テンプル・グランディン著 中野ゆかり訳 『ビジュアル・シンカーの脳』 テンプル・グランディン著 中野ゆかり訳	テンプル・グランディンさんは、米国の自閉症当事者。彼女は、精神科医であるオリバー・サックスの著作『火星の人類学者』で火星の人類学者として紹介されているように、自閉症当事者として米国ではとても著名な存在である。 彼女の著作では、自閉症をネガティブな存在として扱われていない、定型発達の人とは違った思考タイプの存在として扱われている。定型発達が言語を用いた思考に秀でているのに対して、自閉症者は視覚を用いた思考に秀でているとし、ビジュアル・シンカーの脳と読んでいる。 ビジュアル・シンカーは、頭の中でイメージを見るから、高速で連想。言語思考者のように言語による一貫性のある思考とは違った思考法があるとしている。両者が相互に補い合うことが社会の発展のために重要だと考えている。脳の多様性（ニューロ・ダイバーシティ）につながる考えを提起している。

推薦図書（2）

○大脳新皮質の役割に関するもの

書名	概要
<p>『考える脳 考えるコンピューター』 ジェフ・ホーキンス サンドラ・ブレイクスリー著 伊藤文英訳 早川書房 2004年</p>	<p>ジェフ・ホーキンスは、Palmと呼ばれる携帯情報端末を開発した事業家。 本書は、ホーキンスが新しいコンピューターを作るためには、人間の脳がどのような構造で、どのように動いているのかを研究することが重要と考え、その研究の成果をまとめたものである。 特に、大脳新皮質に着目し、様々な文献を読み、その働きをコンピューターサイエンスの視点でまとめた著作である。 新皮質の柱状構造（皮質コラム）で行われている、階層処理、パターン認識、シーケンス学習、トップダウン情報とボトムアップ情報の突合による予測、学習方法等とても興味深い内容で溢れている。</p>
<p>『脳は世界をどう見ているのか』 ジェフ・ホーキンス著 大田直子訳 早川書房 2022年</p>	<p>前著の後で積み重ねられた研究成果を詳細に分析し、大脳新皮質の働きに関する知見をさらに深めている。 特に、新皮質は知識を蓄積するために、座標系reference frameと呼ばれるものを使うと推定している。ヒトの空間認知は、場所細胞と格子細胞が相まって行っていることが知られている。この場所細胞と格子細胞役割を果たす機能を大脳皮質の柱状構造それぞれに備わっており、それぞれの柱状構造に記憶された知識（場所細胞としての役割）が相互にどのような関係にあるかを格子細胞としての役割が連携することにより、知識間の関係が地図のように整理されている。こうした状態を座標系と考え、新皮質内の知識は、この座標系により有機的に活用することができるとしている。</p>

推薦図書（3）

○情報科学に視点から脳の働きを明らかにしようとする新しい理論

書名	概要
『予測する心』 ヤコブ・ホーヴィ著 佐藤亮司監訳	ベイズ推論、機械学習等の情報科学の発展を受けて、カール・ Friston を中心として広がりつつある学説を哲学者が解説している書物。 特に、脳を仮説テストメカニズムとして捉え、脳がたてる仮説により予想される感覚入力と実際の感覚入力との間の差を最小にするように、知覚、行為といった脳の活動が行われているとの考え。 統合失調症や自閉症等の病態解明に新たな視点を提供している。